

浄信寺通信

令和 7年夏号

名古屋市中村区名駅五丁目二〇番三
宗教法人浄信寺収益事業部羽塚孝和
TEL (〇五二) 五六一一一七三六
頒布価格 千三百円
(檀信徒会費)

「はかない人間と永遠を求める鬼」

漫画『鬼滅の刃』(吾峠呼世晴)より

この寺報が皆さまのお手元に届くころには終わっているかと思いますが、原稿を書いている時は、参議院の選挙期間中でありました。選挙というしくみもそうですが、憲法や法律、さまざまな仕組みや制度は「死者の意志の反映である」と、憲法学や法律の世界ではそういう言い方が



されるそうです。たとえ最近できた法律や仕組みでも、それには歴史的な積み重ねがあつて、今あるかたちになっているわけです。それは、今はもういない過去の人たちの想いが、今の私たちを制限している側面もあるのですが、過去の人の想いの多くは、よりよい社会を目指す希望であつたと思います。その希望が今につながっている。そうであるならば、これからの先の社会や制度、法律をどうしようかと考えること、そしてあたり私たちは投票という行動をとることができるのですが、それは今ある私たちの希望が、未来へとつながっていくことになるのだと思います。

仏教という伝統も、インドのお釈迦さま、浄土真宗でいえば親鸞聖人が、その出発点であるわけですが、その後の数知れない人々の想いがその教えを継承して、今の私たちにまでたどり届いているのです。

永遠というのは人の想いだ 人の想いこそが永遠であり 不滅なんだよ

これは『鬼滅の刃』という漫画に出てくる言葉です。人間と鬼との戦

いを描く漫画です。人間を、病になり死んでいく惨めな存在だと蔑み、自分は永遠であり不滅だという鬼に對して、鬼殺隊という組織の当主が語った言葉です(『鬼滅の刃』16巻、137話)。その直後、この当主は鬼を殲滅するという想いを残された者たちに託し、亡くなります。

『鬼滅の刃』は、吾峠呼世晴氏が『週刊少年ジャンプ』(集英社)に2016年11号から2020年24号まで連載され、既に完結しています。その後、アニメ化や映画化もされた。

内容は平安時代に、ある男が病氣

平和公園墓参のご案内

日時：8月12日(火)
13日(水)

午前8時頃～午後1時頃



『鬼滅の刃』 6 巻 4 7 話

を治そうとして誤って鬼となつてしまします。その鬼が人間に血を分け与えると、その人間が鬼になり、鬼が増えていきます。あるいは鬼に襲われた人間が、鬼になることもありまます。その鬼たちとそれを倒そうとする「鬼殺隊」との戦いの物語です。

時代は大正時代です。主人公の竈門炭治郎（かまどたんじろう）は、肉親を鬼に殺され、厳しい訓練をへて鬼殺隊に入ります。主人公は努力、忍耐、仲間との絆といった要素で強

くなつていきますが、その過程で、生来もつていた特別な能力もだんだんと開花していきます。他の隊員たちも、それぞれに様々な個性を持っています。「呼吸法」や「全集中」を体得し、それに基づく技を繰り出し、鬼たちと戦います。

これだけなら、典型的なヒーロー漫画ですが、この漫画に深みを与えているのが、敵である鬼の背景を詳しく描いている点だと思ひます。鬼にも鬼になつてしまつた理由があるのです。鬼になる前は、乱暴であったり、盗人だつたのですが、それには事情があり、みなそれぞれの苦悩の人生を生きる普通の人間でした。人生の挫折に生じた心の隙間、そういったところに鬼に入りこまれ、自らも鬼となつてしまふ。裏を返せば、誰しも鬼になる可能性を秘めていると言う事です。

大乘仏教の『涅槃経』という經典では、「一切衆生悉有仏性（すべての生き物には仏になる可能性が備わっている）」と私たちを見てくださつていますが、その言い方を借りるなら、「一切衆生悉有鬼性」と言えるでしょうか。「さるべき業縁の」もよおせば、いかなるふるまいもす

べし（そうするはずの条件に促されれば、どのようなこともするでしょう）」という『歎異抄』の言葉も想起されます。

主人公の炭治郎の家族は鬼に襲われますが、妹の禰豆子が唯一生き残ります。鬼に襲われれば、死んでしまふか鬼になるかのどちらかなのですが、禰豆子は、鬼の性質を持つものの、なぜか人間としての理性を保っている。兄のことはわかるし、人間を襲つたりもしない。しかし、いつ理性を失いここで言う完璧な鬼になつてしまふかも分からない。

鬼の能力を発揮した後は、疲れるのか、長い眠りに入ります。その時は子どものように体が小さくなるのです、その禰豆子を炭治郎は箱に入れ背負つて移動し、時にはそのまま戦つたりもする。炭治郎はまさに鬼を抱えているのです。その炭治郎との戦いを通して、鬼たちは忘れていた自分の過去が蘇ってきます。そうすることで自らに埋め込まれた因縁がほぐれ、中には、倒されたことに感謝しながら死んでいく鬼もいたりするのです。

こうした視点は、親鸞聖人が『教行信証』で引用される『涅槃経』

のアジャセ王の物語を想起させます。父殺しという悪業に苦しむアジャセは、お釈迦さまに出遭「アジャセのために涅槃に入らず」という慈悲の光につつまれて、救われたのでした。

コミックの末尾に付された作者による読者メッセージに「報恩謝徳」という言葉が使われていたり（55巻）、『鬼滅の刃』の作者は仏教に造詣が深いと思ひれます。そもそも、登場人物にもお坊さんがいます。「柱」というリーダー格の隊員の一人で鬼殺隊最強とも言われる悲鳴嶼行冥という人物です。彼は、集中力を高めるルーティンとして訃報があつた時など、常に「南無阿弥陀仏」と称えています。その他にも別の登場人物が『阿弥陀経』を称える場面もあります。

「柱」の一人、煉獄杏寿郎（れんごくきょうじゅろう）は、鬼から「人間は古い、死ぬ。しかし鬼になれば永遠に生きられる。だからお前も鬼になれ」と言われますが、次のように答へ、拒否します（『鬼滅の刃』8巻、第9話）。

老いることも死ぬことも 人間という儚い生き物の美しさだ 老い

るからこそ 死ぬからこそ たま
らなくいとしく 尊いのだ

仏教には「諸行無常」という教えが
あります。これをサンスクリットと
いうインドの原語に返すと、samskara
anityaとなります(文法上
の格変化や長母音などの表記は便宜
的に省略しています)。sarvaは「す



『鬼滅の刃』13巻109話

べて」という意味で漢訳語が「諸」。
samskara (サンスカラ) は、「あ
わせる」という意味の接頭辞 sam-
「つくる」という意味の動詞から
の派生名詞で「部分を再統合して完
全な全体をつくる」という原意があ
り「行」と漢訳され、anityaは「永
遠」の意味の nitya に、否定の接頭
辞 a がついて「永遠ではない」とい

う意味になり「無常」と訳された。

仏教以前に存在したバラモン階級
を中心とするインド古来の祭式文化
では、サンスカラは、一日や一年、
あるいは一生という円環構造(ある
要素が輪のように連なり、循環する
構造のこと)において、その都度ご
とに決められた祭式儀礼の一つ一つ
を全て滞りなく完遂することを意味
した。それにより時の円環構造は連
続し、永遠(永久)が確保されると
された。そのインド古来の宗教を否
定したシュラマナ(沙門)と呼ばれ
た自由思想家たちが、お釈迦さまと
同時代的に多数あらわれました。お
釈迦さまもその一人となったのです
が、彼らは、インド古来の祭式文化
を担うバラモン階級が権威主義に墮
落して、いまや欲望の虜になっ

ると批判した。祭
式によって成り立
つ、一定のサイク
ルが繰り返される
円環構造は、いま
や無始無終(始ま
りもなければ終わ
りもない、その逆
もまたしかりとい



う意味)の時間だけが流れ、人間を
押し流していく「輪廻の洪水」であ
ると自覚する新しい宗教運動を担い
ました。インド古来の祭式文化が、
「諸行」によりこの世界は「常 nitya」
となるという世界観を持つのに対し、
仏教は「諸行」は「無常 anitya」で
あると、たった一文字をつけるだけ
で、バラモンの世界観を根本的に
ひっくり返してしまった。

もちろん「諸行無常」は教えです
ので、他の宗教を批判するために語
られたのではなく、自分と自分を取
り囲むこの世界をそう観察しなさい、
ということなのです。仏教では、私たち
の内にサンスカラがあると教えま
す。仏教の根本に「縁起」という思
想があります。「縁起」とは「これ生

『鬼滅の刃』15巻133話

『鬼滅の刃』 8巻63話



ずるよりかれ生じ、これ滅するよりかれ滅す」という定型文で説かれて、「十二支縁起」という形式に整理されました。私たちは誰しも老い死んでいく存在です。ではその「老死」は何に縁っておこるのか。それは人間として生まれることによるのだ、とこのような仕方、表層から深層へと順に個人の存在が観察されていき、十二の層から形成されていると究明されたのでした。深層から表層の順で示せば次のようになります。

むみよう ぎょう しき みようき ろくしよ そく じゆ
 無明・行・識・名色・六処・触・受・
 あい しゅ う しゆ ろうし
 愛・取・有・生・老死

各支の説明は割愛しますが、老い死んでいく生存の根本に「無明」という根源的愚かさがあり、その無明により「行（サンスカラ）」がある。「行」

とは「部分をあわせて全体をつくりあげること」ですが、それは記憶や歴史意識、行為習慣として自分のなかに積み重なっていきます。その動因に「無明」があるのです。仏教における「諸行無常」の「諸行」とは、無明にもとづき、世界を自分の都合にあわせて見ること・自分の思惑によってつくりあげること・こうした行為でつくられた世界のことです。

「心に突き刺さった矢」という表現がされるのですが、その矢のごとき無明をなくしてしまいなさいとお釈迦さまは諭されます。しかし、自分の都合や自我意識を捨てることのできないわれわれ凡夫は、無明にもとづいて、知らず知らずのうちに、自分の都合にあわせて世界をつくり出しているのです。そんな世界は当然「無常 anicca」です。自分の思惑など、はかなく崩れ去ってしまうものです。時間がどんどんと、はかなく過ぎ去っていくなかで、特に「生老病死」という様相は、避けることのできない事実として、思い通りにできない苦悩として、自分自身の上に現れてきます。お釈迦さまが涅槃に入る（つま

り）くなる様子を伝える『大般涅槃經』では、お釈迦さまの入滅直前の言葉として、

比丘たちよ、さあ、いま私は告げよう。諸行はうつろいゆく。怠ることなく励みなさい。

仏教が「諸行無常」というとき、すべては移ろいゆく、だからこそ怠ることなく励みなさい、という、一瞬一瞬ごとの命の尊さというものがメッセージとして込められているのだと思います。

煉獄杏寿郎（鬼殺隊最高位剣士集団である柱の一人）は先に述べた鬼とのやりとりの後、戦いの末に亡くなってしまうますが、その最期に、炭治郎たち後輩を前に次のように述べます（『鬼滅の刃』6巻、第9話）。

胸を張って生きろ 己の弱さや不甲斐なさにとれだけ打ちのめされようと 心を燃やせ 歯を喰いしばって前を向け 君が足を止めて蹲（うずくま）っても時間の流れは止まってくれない

『大般涅槃經』の言葉を言い換えたような内容であると感ずるのは、私がお坊さんだからでしょうか。よも

修 勤 講 恩 報

令和7年11月9日（日）

午前10：30～

勤行・お説教・おとぎ

や鬼のように永遠は望まないにしろ、私たちはなるべく若くありたい、できれば病気になるたくない、少しでも長生きをしたいと思っています。人間としての細やかな想いですが、それが私たちの持つてゐる鬼の種な（たね）のかも知れません。老いること、病気になること、死んでいくことを蔑む鬼は、私たちの心の内にも居るのです。心に突き刺さった矢を抜くことはできませんが、生きて死んでいくことの尊さを大事にし、心を燃やすような生き方ができればと思っています。

（浄信寺副住職 羽塚高照）